



1. 調査業務地の概要

1-1. 国頭村の概要



国頭村は、平成20年に村政100周年を迎えた歴史ある村である。本村は沖縄島北端の北緯26度、東経28度付近に位置する。県内では5番目に広い194.80km²の面積を有し、その大半は日本国内でも生物多様性に優れ世界的にも重要な地域として注目をあびている、亜熱帯照葉樹林「やんばるの森」が84%を占めている。



しかしながら、全国の地方の村と同様に本村においても人口の流出、少子高齢

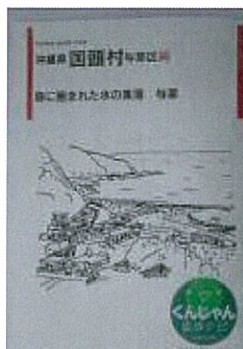
化、過疎化、農林漁家の後継者不足、公共事業の急激な減少による失業者の増加等の問題が顕在化してきており、地域活力の低下や農地や森林の荒廃化など地域資源の維持、保全が危惧される状況もみられる。

項目	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成19年
人口 (人)	6,114	6,015	5,825	5,546	5,632
一次産業就業 (人)	871	734	595	517	-
歳出決算額 (百万円)	4,269	5,215	6,528	6,594	4,482
普通建設事業費 (百万円)	1,929	2,962	3,329	3,080	1,118
少子率 (%)	22.3	21.0	18.3	15.1	13.8
高齢化率 (%)	21.3	23.8	25.7	27.2	27.8

そこで村民の多くがチャーニガサンネーラン（どげんとせないかん）と考えており、財政力指数が0.25と財政基盤の脆弱な当村においては、雇用の創出、若者の定住などによる人口増加を図るため、最大の地域資源であり、他地域への優位性が図れる自然資源を活かした産業の構築が課題である。

1-2. 与那集落の概要

与那集落は当村の西海岸のほぼ中央部に位置しており、東シナ海に流れ込む与那川の河口部のわずかな平地に集落を形成し海・山・川に囲まれた、自然豊かな古き沖縄の原風景を残す地域である。集落には自然に育まれた多くの資源や文化が残っており、その中のウンジャミ（海神祭）は五穀豊穡、子孫繁栄を祈願する代表的な祭りである。



今から44年前518人あった集落の人口は、今年の2月末現在254人と約半減しており、そのうち65歳以上の高齢者が80人、小・中学の児童が30名と人口ピラミッドが逆三角形の少子高齢化の進む農村である。



その集落で約30年ぶりに50歳代区長が選出され、地域活力復活のための数々の取組みが試みられている。その試みの一つとして平成19年度に村



の主催による人材育成事業の中で、区長を初めとした集落の有志により集落内の宝物(資源)を発掘し、それらを紹介するガイドブックをまとめた。

そこで、そのガイドブックを活かした集落内の自然に育まれた生活文化や遺産を案内するエコツアーを企画し、交流人口を増やすことにより地域活性化を図る事とした。

本事業では、その活動の核となる担い手づくりを行い、活力あふれる魅力的な地域にすることにより、若者の定住促進を目指すものである。

2. 業務の推進組織と体制

調査業務を実のある活動にするため、与那集落の各組織が関わるだけでなく、集落に関係する企業、大学付属施設、NPO、村役場、県などによる協議会を平成20年8月4日に設立し、活動を推進した。

【協議会構成員】

与那区(区長、会計、代議員、老人会長、成人会長、婦人会長、子ども育成会会長、)
 国頭村森林組合長、琉球大学付属亜熱帯フィールド科学教育研究センター与那フィールド、与那郷友会、NPO 国頭ツーリズム協会、国頭村、沖縄県

3. 活動内容

ユナムンダクマ協議会の活動は、与那区代議員で組織する幹事会を中心に実践計画をたて、集落民や協議会員の協力を得ながら、人材育成のための研修・聞き取り調査や実践活動を行った。



3-1. 活動概要

当事業では、計46回の様々な取組みを計画し、その取組みに延べ352人の集落民が関り活動を実施した。そのうち計11回の実践活動では、集落散策ツアーや高ひら散策ツアーを実施し、計207人の一般参加者を受入れ、案内ガイドの人材育成を努めるとともにツアー内容の充実を図った。

3-2. 研修・聞き取り調査

主な研修・聞き取り調査の活動は、以下の通りである

● 案内ガイド研修

日時：平成20年10月4日(土)、場所：国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」、講師：ガイド・大城馨、大島順子・琉球大学観光産業科学部准教授、研修者：6名

目的：案内ガイドを担う人育の手はじめとして、ツアー参加者との接し方やコミュニケーションの取り方などを実地研修で学ぶ。

内容：「やんばる学びの森」のフィールドセンターにてガイドテクニックのレクチャーを受け、森林散策路を使いガイドツアーを体験した。



● 研修・先進事例地に学ぶ

日時：平成20年10月29日(水)、場所：与那集落内
 講師：山梨県NPO法人つなぐ 山本育夫氏、研修者：2名

目的：山梨県で自らの地域調査をもとにガイドブックを作成し、それを基に散策ツアーを実施しているNPO法人つなぐ代表・山本氏を迎え、与那で計画している集落散策ルートやその手法を体験してもらい、その感想や助言を今後の活動に活かす。





3-2. 実践活動

●実践活動（琉球大学観光科学科・夏季集中授業との連携ツアー）

日時：平成20年9月24日、場所：与那集落内

ツアー体験者：琉球大学観光科学科 学生8名、大島 准教授、案内ガイド：4人

活動の目的：観光について学んでいる学生達をツアーのモニターとして案内することにより、ガイドの実践の機会を得るとともに、そのツアーの評価を受けガイドのスキルアップやツアー内容の充実を図るために行った。また、学生たちには、大学の授業の一環として「インタープリテーション論」を体験しながら学ぶ機会とする。



活動の内容：与那集落入口付近の国道駐車場に集合し、活動の主旨を大島先生より説明を受ける。その後、区長による集落の概要説明を行い、ガイドブックの内容に沿って一通り集落散策を行う。散策終了後、公民館に集まりツアーの内容や評価について意見交換を行った。

●実践活動（地域づくりネットワーク連携集落散策）

日時：平成20年10月11日(土)、場所：集落内

参加者：14名、対応者：8人

活動の目的：県内で地域づくりの活動を行っている団体と連携し、集落散策ツアーにモニターとして体験してもらい、感想や意見を集め今後の活動に活かす。



内容：区長による集落の概要説明後、ガイドブックを利用しながら集落内を案内する。散策後の茶菓子の提供を集落中央にあるアナガー（湧水）で行い、のんびりした雰囲気を作る。また、サプライズで集落の有志で組織するタカヒラ三線クラブの演奏も入り大いに盛り上がる。

4. 活動の成果



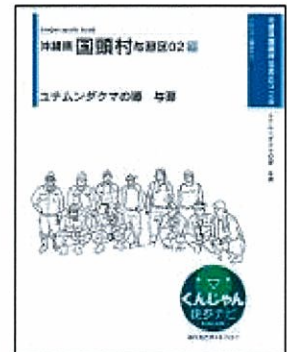


◎実践活動によるツアー受入人数 201 人、集落民の活動参加延べ人数 334 人

- 当初4回の計画であった実践活動を8回行い、ガイドテクニックは大きく向上した。
- ツアー参加者の高評価を聞き、ツアー受入に関わった集落民や、口づてにその話を聞いた人達にも集落での暮らしを見つめなおす気持ちが生まれ、集落に対し誇りが芽生えてきている。
- 今回の活動では、4人のガイドと5人の料理提供者の育成が図れただけではなく、ツアールート整備や屋号看板作り、ツアーの手伝いなど、人口254人（実質居住者は200名程）の集落で、延べ334人の集落民の参加が得られた。さらに、当集落の活動に刺激され、別集落でも同様の集落散策活動の動きがあり、3月21日に連携を図るためのツアーを体験する交流会を予定しており、今後さらなる広がりも期待できる。

◎古老からの聞き取り情報で、第2版のガイドブックを作成した

活動を通し、計5回、延べ9人の古老に聞き取り調査を行い、その度毎に新たな情報が多く得られ、第2版のガイドブック作成に繋がったが、古老から「今まで伝えたくても伝える場所がなく、この機会に伝えられて良かった」との話を聞き、この活動が老人の居場所作りにも役立ったといえる。



◎小学生により、屋号名板作りを行い、75枚作成した

各家々に付けられた屋号名は、その屋敷のあった地形や元家との繋がりを元に付けられているが、時代とともに使用されなくなりつつあるため、その復活と子供達に繋がりの意識を高めてもらうため作成した。



県内から参加したツアー客には大変好評で、ぜひ同様に取り組みたいとの声も多く聞かれ、各地域での広がりを受け継がれれば楽しみである。

4-2. 今後の課題

今回の事業に取り組んだ事で、このツアーの魅力の高さや、地域への誇りを取り戻した人達は増えているが、今後の課題として以下のことが挙げられる。

- ◎受け入れ体制整備と裾野の拡大：まだ地域住民に十分浸透しているとは言えないため、受け入れ体制を地域におき、さらなる裾野の拡大に努めていく必要がある。
- ◎自主財源の確保：独立した組織として運営していくには、自主財源の確保が必要であり、ツアー参加料金の設定や農産物販売体制の整備などが急がれる。
- ◎多様な人材の関わり：ツアー参加者は集落内外にある遺産などを使い暮らしていた当事者からの話を望んでいるため、オジー、オバーの関わりが重要である。
- ◎他地域・他団体との連携：小さな集落の活動のため、その広がりには限界がある。また、より幅広い集客を得るため、他地域の同様な活動との連携や、ツーリズム団体との連携が必要。

4-3. 今後の活動

当地域は、過疎化にあえぐ地方の小さな集落で、活動を担う人材も現時点ではまだ限られており、急激な変革を求めると無理が来て活動が継続出来ない事もあり得る。そこで、将来目標の「若者が住みたくなる村づくり」に向け、身の丈に合う活動を意識しながら今後も毎月1度の活動を継続していく。